

下市市恵比寿について

二宮 壽

一、市恵比寿と言いつい伝えられる三体の石像

(左写真)

下市の八坂神社には市恵比寿と言いつい伝えられる三体の石像がある。一体は人体に似た形の自然石で、あと二体は恵比寿の石像、その中の一体は首がとれて無くなっている。昨年七月石像の土台がゆるみ危険のため、下市地区で土台を固め修理した。この石像については何も記録がないのであるが、石像文化専門別府大学准教授の小泊立



矢先生に平成十八年八月に見て頂いた結果恵比寿の石像二体は江戸時代のもので、自然石のものは何時

のものとは言えず、また、自然石の方が古いと断定はできないということであった。

昭和四十年代に書かれた故油布優氏の「下市昔話」には、八坂神社の恵比寿は下市では一番古い遺

跡で、下市に昔市が開かれていた頃の市恵比寿だと言いつい伝えられていると書かれている。

以下この石像について資料をもとに考察してみたい。

二、下市は古く市の開かれた地所で、石像は市恵比寿である。

この市恵比寿は江戸時代まで下市の村中であつたが、八坂神社の移転の際、以前おかれてあつた形で三体揃つて移されたと聞いている。八坂神社の移転は明治の初め、神仏分離、一村一社の政令により八坂神社に神を合祀し、市恵比寿もそこに移したが、森がないので神社らしくないという人々の要望に答え、大正の初め当時の区長であつた内田孝次郎氏が下市の鬼門（東北）にあたる現在の土地を寄贈したので移転し、同時に内田氏の家の西隣にあつた恵比寿も現在地に移されたといわれている。

江戸時代の書「雉城雜誌」第十一卷の「挟間市」の項には

「今両村二分カレテ上市下市アリ。蓋古駅之址ニシテ、府中ヨリ三里、或ハ二里四里ノ間、皆市ト称スル地所謂植田庄植田ノ市、戸次ノ庄市邑、速見郡古市等也。按ニ延喜式兵部省云、大分置傳馬五疋云々。」以下略

この資料（雉城雜誌）でみれば古くは挟間市と呼ばれたものが上市下市に分かれたものと思われる。

いつ頃上市下市に分かれたのかについてであるが、下市の地名が

歴史書に見えるのは甲斐守文書である。平凡社日本地名辞典大分県によれば下市村の項に

「上市村の東にあり、東は中尾村（現大分市）。天正七年（一五七九）八月吉日の阿南庄挟間南方四百貫分覚（甲斐守文書）に「下市村」と見える」

とあり、従って、挟間市が下市、上市に分かれたのは大友時代、つまり狭間氏が狭間統治の時代以前と思われるのである。

江戸時代、下市は中郷下市組の中心の村として栄え、郷の中には、小野津留村、国分村、平横瀬村、下市村、上市村、鶴田村、向原村、中村、海老毛村が属していたと言われる。街道筋で店も多く、現在の店の屋号の残る家が多いのである。

屋号は油屋、店（万屋）、桶屋、酒屋、紺屋（こう）、旅籠屋、麴屋、下駄屋、種物屋等々である。市の開かれた場所であったこともとなり発展したものと思われる。

昭和三十年発行の「地名覚書」染矢多喜男編によれば、

「上市・下市 大分郡挟間町大字挟間

挟間は古代大分郡におかれた伝馬の址であり、「市」はその伝統をつぐものという説があります。「鋤埼」すきぎきの路傍にエビス祠があり上市部落で祀っています。祭日は十二月十日です。祭日には八十年前までは市が立ったと伝えますが、詳細は記録されていません。昔何度も火事があったのでエビスを祀ったということです。現在エビス講は引き続き行われています。

十日前に米を五合ずつ集め当日甘酒をわかして、部落の人や通りがかりの人に飲ませました。ある年甘酒のかわりに赤飯を炊いたところ、その年に火事があったので、その後は甘酒にしているそうです。エビスには線香・ろうそくをあげ、茶碗に入れた甘酒を供えてお経をあげます。

下市の方は「上大六」に八坂神社があり、この神社にエビスを合祀してありましたが、土地が低いので二km東の丘陵上に遷しました。八坂神社の祭日にエビス講が行われていました。ドブ酒をエビスに供えたが、後に甘酒にかわりました。

部落全体が祀ったのではなく、特定の一軒だけがありました。その家が功德を与えるという意味で、自分の家で甘酒を飲ませましたが、人々が遠慮するので、神社で飲ませるようになったそうです。いつの頃かエビス講も絶えてしまいました。八十年前まではエビス市が立っていたということです。

現在上市の恵比寿は不明である。また、「地名覚書」は舞鶴高校の教師染矢多喜男氏が、歴史クラブの生徒の聞き取りをまとめたもので貴重なものではあるが、下市の項について問題もあるので、少し補足しておきたいと考える。

私の聞くところでは、江戸時代まで下市のエビスはこの文中にある特定の一軒だけが甘酒を出していたという家、つまり現在の八坂神社の土地を寄贈した内田孝次郎氏の西隣にあったものである。内田氏の家は秀才ばかりで東大、海軍兵学校などに子どもが進学、現

在下市には誰も残ってはいない。また、江戸時代エビスのあった西隣の家の老夫婦が昭和十六年、三十八年に(内田家に人がいなくなつた頃)、この恵比寿の祠の修理をした記念碑が恵比寿の横にたつている。この家の江戸時代の屋号は「西」である。エビスの西側の家なのでこの屋号がついたのではないのであろうか。恵比寿が地区の人々から大事にされた時代のことか推察される。江戸時代のお庄屋の東隣の屋号は「東」であるが、屋号からみると「西」の屋号が東にあり、「東」の屋号が西で逆になっているのである。八坂神社では現在この由来に因み、大晦日には甘酒の振舞いが復活されている。

三、市恵比寿の信仰は、下市にどのようにして伝わったのか。

地名覚書の中で、上市では火事が多いのでエビスを祀つたとあるとともに、昔市の開かれたことが書かれているが、市に市恵比寿というとりあわせは民衆の中で自然に発生した信仰とは考え難い。誰かが伝えたに違いない。このことで一つの資料がある。それは江戸時代の書雉城雑誌の四巻「蛭子祠」である。

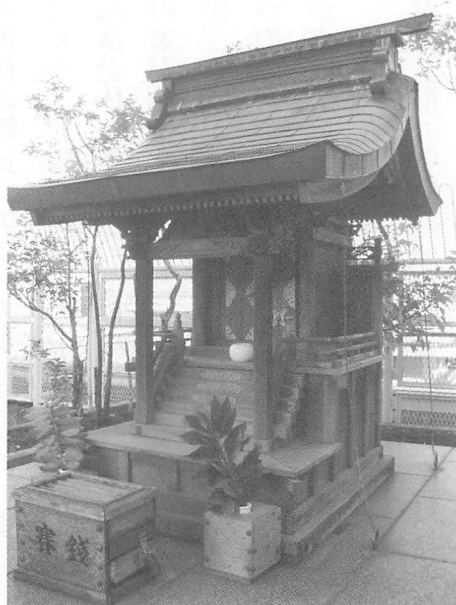
蛭子祠―祭神 蛭児命

一社 西上市町、一社 檜物町、一社 小物座町、一社 下市町、一社 胡町、一社 萬屋町、一社 舟頭町、以上七社。
雑誌曰、府民ノ口實ニ云ク、建久年中、大友左近將監能直、下総国古河ノ市ノ例ニ倣、同所ノ市蛭子ヲ若宮ノ神人矢野氏、富成氏ヲシテ勸請セシム。其始ハ宮殿ヲ工座町ニ営ミ、二月ヨリ十二月ニ至リテ十六ノ日ヲ以、府民ニ市ヲ立シム。ソノ後慶長七年當府町直ノ時

右ノ町々ニ勸請ス。祭日同ジカラズ。當府町直以來近代迄、一六日ノ日東上市町ニ於テ市ヲ立ル。以下略

この文面にあるように、大友初代能直が府内河原市に七蛭子をおいたのであるが、狭間氏初代の直重は能直の孫であるので府内河原市の恵比寿を見習い、狭間市にもおいた可能性は高い。

能直が七蛭子を置いた府内河原市の町の図が掲載された雑誌



「海路」に鹿毛敏夫氏作成の「十六世紀の豊後府内の現在地比定図と、江戸時代の城下町に蛭子が移転したといわれる町の図があるので参考までに次べー

ジに掲載した。

下市の恵比寿と比較したいので、大分に残る恵比寿をこの図をもとに探したが、現在残っているのはトキハ百貨店の屋上の檜物町の蛭子と、若宮八幡の小物座町の蛭子だけのようである。しかし、トキハや若宮八幡の恵比寿と比較するに至っていない。下市の自然石の恵比寿は大友時代のものである可能性もあり、もしかしてそうであるとするれば誠に貴重なものといわねばならない。(右写真はトキハ屋上の、府内城下の檜物町の市恵比寿)

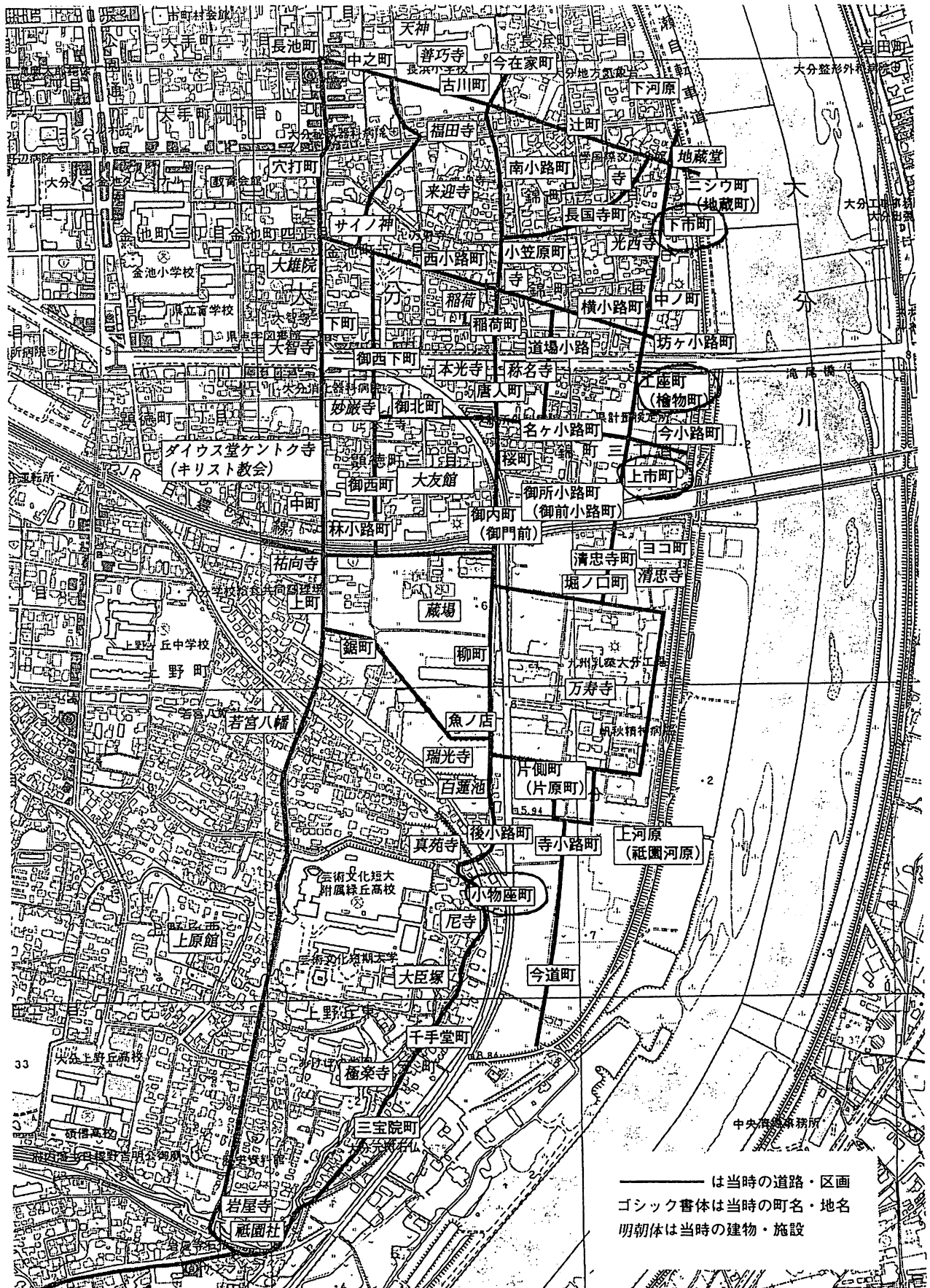


図3 16世紀の豊後府内の現在地比定図

